博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	馬場靖人
論　文　題　目	世界の色を塗りかえる――知覚と言語の〈色盲〉近代史――

審査要旨

本論文は、いわゆる「色盲」なる概念が近代社会においてどのように形成され、制度化されていったかに関する思想史的研究である。「色盲」と呼ばれる現象をめぐって展開された科学的・医学的言説とその制度化における諸問題を、フーコーの「考古学」的手法を用いて分析している。本論は三部構成である。まず第一部では、近代以前のまだ「色盲」という概念や名称がなかった時代の黎明期の色盲研究が取り上げられる。主には、ドルトン、ゲーテ、そして色盲の芸術家としてシャルル・メリヨンが論じられる。ドルトンは近代を切り開いた偉大な科学者の一人であるが、当人が色盲者であり、そのため自己観察を通して、歴史上初めて「色盲」という現象を科学的・医学的に扱い、色名（言語）と色覚（知覚現象）との差異を認識し、問題にした。ドルトンが考えた色盲の原因（「青色ガラス体仮説」）は間違っていたが、言語と現実とのずれ、名称と知覚とのずれを根源的な問題として提示したことは、彼を「色盲論の父」と呼ぶにふさわしい功績であることが描かれる。ゲーテは彼の色彩論との関わりで色盲現象に関心を抱き、色名と色覚との不一致の問題を考察し、さらに言語を超えた色盲の世界を描出するために、色盲者の画家の助力を得て色盲世界の絵画を作成した。また「色相環」という彼独自の色のコスモロジーにもとづいて色盲現象を解釈しようとした。興味深いのは、ドルトンもゲーテも、言語と現実とのずれを「青」色によって表象していることである（色盲をドルトンは「青の過剰」、ゲーテは「青の欠如」とみなす）。著者は色盲にまつわる「青色」の問題を、ロマン主義における青色の特権性やベンヤミンのアレゴリー概念と接続し、色盲者独特の「青」の世界が「正常色覚者」の色世界にも通じる普遍的射程をもつことを、様々な資料を用いて論証している。そしてその一つの代表的事例として、メリヨンは、この言語や表象と知覚や現実とのずれを、色盲の青銅版画家として表現したことが、ボードレールやベンヤミン、特にギュスターヴ・ジェフロワ（1855-1926）の文献に依拠しながら論じられる。このジェフロワのメリヨン論は日本ではほとんど知られておらず、その文献の意義（ベンヤミンへの影響も含め）を知らしめたことは、本論文の貢献の一つである。

ドルトンやゲーテにおいては、視覚の多様性を示すものとしてむしろ肯定的にも捉えられていた「色盲」現象が、「異常」や「病」として管理や治癒、さらには排除の対象になっていくのは、19世紀に入って産業社会が確立し、医学や生理学が急速に発展してからである。その展開を追跡するのが第二部の内容である。そこでは大きく三つの軸がある。1. 近代資本主義の発展と交通網の整備により、色盲者をリスク管理の対象とする必要が生じたこと。2. 近代社会における「視覚優位」のメディア環境の形成（出版印刷業、写真、映画、人工塗料、等々）。3. 医学・生理学の発展とカント主義との融合。1.と 2.については歴史学や社会学における研究の蓄積があるが、本論文の特徴は、そこにカントの超越論的（先験的）哲学の生理学化あるいは生理的なものの超越論化の問題を絡めて論じたことにある。カントは人間の認識や経験に先立つ、人間の先験的認識構造を解明することによって近代哲学を切り開いたが、カントにおいては形式的・抽象的・論理的だった超越論性が、生理学的なメカニズムによる経験や認識の規定へと変質していくプロセスを、本論文は豊富な色盲言説に当たりながら析出していく。グラッドストン、ガイガー、マグヌス、ニーチェ、ショウペンハウアー、ヘルムホルツ、ヘリング、ホルムグレン、シュティリング、そして石原忍……。色盲をめぐるこれらのメジャー、マイナー様々の生理学、哲学、そして場合によっては政治の言説を、資料にもとづき丹念に辿ることによって、抽象的だった先験性の問題が文字通り受肉化し、色盲者に対する固定観念や誤った観念が、科学や医学の権威のもと（さらには「色覚進化論」のもと）、政治的にも社会的にも定着し、絶対化していく様が鮮やかに描きだされている。カント哲学の生理学化についての第二部の記述は、大変豊かな内容であり、色盲論の研究者である審査員から、「世界でも初めての試み」であり、「画期的」との高い評価を受けた。

氏名　馬場靖人

第三部は、以上の西洋における色盲論の展開を受けて、日本の近代において色覚検査体制を作り上げた軍医・石原忍と「石原表」の問題が論述される。石原は第二部までに描かれた西洋の色盲言説をよく知っており、またシュティリングの「仮性同色表」を改良して「石原表」を作りだしたことからもわかるように、陰に陽に西洋近代の色盲言説を輸入していた。そのようにして作り出された色覚検査表「石原表」は、その後、世界の色覚検査の標準器具として普及していくことになる。著者は石原表の特徴を以下のようにまとめる。①見る時間と空間の統御（短い時間と限定された距離）、②簡便性・携帯性（いつでも、どこでも、誰によっても検査可能）、③知の所有者（医師・教師・学者）・知の審級の前提、④言語や記号による告白システム。要するに、色覚検査は、フーコーが近代の「大監禁」システムとして抉り出した規律訓練体制・パノプティコン体制の一環として機能していることが明らかにされる。加えて日本においては、これが軍国体制と連動し、軍隊に始まった色覚検査が特定の職業と学校教育の中に入っていく。その時、視覚が本来持っている多様性や複合性は、「戦う身体」「働く身体」「美しい身体」（「産めよ、増やせよ」）という当時の軍国体制に合わせて馴致され統御されていく。こうした経緯を歴史的に、また認識論的に記述する第三部の分析は、大変明晰かつ刺激的である。

そして最後に特筆すべきは、本論文が単に石原表を、軍国体制に加担し、色盲差別を作り出した「悪」として糾弾することにのみ終わっていない点である。著者によれば、石原表とその土台にある近代西洋色盲論はその内部に必然的な矛盾や揺らぎを抱え込んでおり、それを抑圧することがかえってその矛盾を顕在化させる契機となる。たしかに石原表は軍国体制における「国民の（健全な）身体」の名のもとに視覚を整流する装置であったが、同時に色名（言語）と色覚（色現象）との不一致、さらには言語によっては統御されえない色覚の多様性をも逆に浮き彫りにする装置として機能している。石原表がなければ個人による色知覚の違いが認識されることも、さらには「健常者」においても、本当に皆が同じ色を見ているのかどうかという疑念が生じることもなかっただろう。石原表は「差異を差別へ」と硬直化させる道具であったが、本論文は石原表の中に「差別から差異へ」と巻き戻す契機を読み込むことが可能だとする。事実、石原自身が石原表を作成するに際して、同僚の軍医や学生の色盲者たちの協力を得て、最初は「騙し絵」として、ある種の「娯楽」として表を作っていたのだった。著者は、石原表が当初持ちながらもその後抑圧されてしまった「遊戯性」を、後期印象派の画家スーラや現代日本の芸術家草間彌生の作品とも関連づけ、石原表がもつ遊戯的・芸術的な潜在力を指摘する。これは視覚の多様性と複合性という普遍性を万人に広げ、「正常」と「異常」、「健常者」と「障害者」、「マジョリティ」と「マイノリティ」といった分断支配を突き崩す可能性を、当の抑圧装置そのものの中に発見していこうとする、きわめて興味深い試みであり、赦しと和解の可能性への挑戦でもあるだろう。

問題点としては、序論に方法論の明示がないこと（読めばフーコーの「考古学」の手法であることはわかるのだが）、一つの図版の不備、各部のなかの体裁上の不統一などが挙げられたが、論文全体としては、色盲のエピステモロジー研究という世界でも類をみない（人文社会科学系における唯一の色盲論の専門家である徳川氏によれば「世界で唯一の」）画期的な仕事であり、内容上も哲学・医学・生理学・政治学・社会学・芸術学・メディア論等々の豊富な知識と資料に立脚し、なおかつ社会実践との連携までをも視野に収めた、きわめて優れた論文であることに変わりはない。以上から、本論文は早稲田大学の博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると判断する。

公開審査会開催日	2017年3月28日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	藤本　一勇	フランス現代思想	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	長谷　正人	社会学	
審査委員	東北大学大学院情報科学研究科・准教授	徳川　直人	社会学	博士（文学）東北大学